



No.32

2024.11.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F
tel・fax：042-396-2430

E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226

口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

6月16日、立川市たましんリスルホールで、市民アーカイブ多摩開館10周年記念として、森まゆみさんの講演会を開催しました。地域雑誌『谷根千』（1984・2009年発行）や懐かしい写真の紹介も交えながら、雑誌の歴史・変化・運動、地域を記録していく意味などについてお話しいただきました。

地域雑誌『谷根千』創刊の頃

雑誌創刊は、最初の子どもが2歳前後になって活発に歩き出し、一緒に街を散歩していた頃です。

当時は、本の索引を作ったり、翻訳などをしながら子育てをしていました。子どもと一緒に街を歩くと、普段は行かない路地に入っていたりする。こんなところにこんな場所があるんだ、ということにたくさん気がつくようになり、街のことを調べ始めました。

あまり有名ではない小さな街のことは資料や紹介が少なく、当時は「谷根千」（谷中・根

市民アーカイブ多摩 開館10周年記念講演会 報告

地域雑誌『谷根千』とその後

「厄介な「時代」をどう記録するか

お話し：森まゆみさん

（作家、編集者、「谷根千記憶の蔵」主宰）



津・千駄木」という言葉もありませんでした。今でも谷中という駅はなく、バス停しかありません。古くからの方は谷中生姜のことは知っていても、谷中という地名はあまり知られていませんでした。

最初は街のことを調べながら、小説や写真集でも出そうとか考えていたのです。けれどもうまくいかず、たまたま一緒に街を歩いていた保育園の友人と私の妹の3人で地域雑誌を始めました。



シリーズ“現場”を訪ねる⑩
「場所のもつ力」から学ぶ
～横浜・寿町関係資料室を訪ねて

- ・2024年12月8日(日)
12:30(集合)～16:00頃
- ・集合：石川町駅北口改札外
(JR京浜東北線・根岸線)
- ・訪問先：寿町関係資料室(ことぶき共同診療所内)、寿生活館ほか
- ・案内人：松本一郎さん(寿町関係資料室・大正大学)
- ・資料代：500円
- ・定員：15人(申込先着順)

【申込み】
ネットワーク・市民アーカイブ
tel・fax：042-396-2430
E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

お金がないので、カラー印刷はせず、表紙はミューズコットン、本文用紙はクリーム上質という、比較的安い紙を使って始めようと考えました。大圓寺の菊祭りに合わせて雑誌を創刊(1984年10月)することに、「菊祭り」をテーマにしました。8頁で千部、印刷費は6万5千円、お祭りまで百円で販売したら、全部売れました。その後、ぜひ欲しいという希望が届き、ちびちび増刷をしていくうちに結局創刊号は1万6千部売れたのです。

銭湯・酒屋・文学と地域：

2号(84年12月)は冬の発行なので銭湯特集にしました。手に取った人に捨てられない雑誌にするため、連載ではなく特集方式にし、これを読めば谷根千の銭湯が全て分かることを目指しました。銭湯を巡って生業の苦勞を聞く。調査シートを作って質問する。

ちなみに当時、15軒あった銭湯で今残っているのは2軒だけです。酒屋特集(85年)を組んだときは60店くらいあった酒屋が、今残っているのは20店前後。約20店はコンビニになっっています。

また、私たちの地域には、森鷗外、樋口一葉、幸田露伴、夏目漱石、宮本百合子、高村光太郎などの文学者がたまたま住んでいたことから、その特集も組みました。ただの文学史とするのではなく、たとえば鷗外の作品で地域がどう描かれているかなどを調べ、地域の歴史としてとらえていくことをめざしました。私は中学・高校で主な小説は読んでいたのですが、大学では政治学を学んだのでノンフィクションとか、社会的なことに目が向いていたのだと思います。

「聞き書き」を始める

もう1つ、地域の歴史を調べて気づいたのは、活字化さ